

VI 1993年度の研究の評価

1. アメリカ合衆国現地調査の評価

(1) 評価問題

《アメリカ合衆国現地調査の自己評価問題》

(1993. 8. 10)

今回のアメリカ合衆国でのフィールドスタディ及びワークショップに関して、以下の質問に答えて下さい。(できるだけ具体的に書いて下さい。)

1. 学校・担当教科について(いずれかに○印を)

学校.....小学校 中学校 高校・大学
教科.....社会科 英語科

2. 調査旅行について(5段階で評定し、数字を)

ニューヨークのフィールドスタディ ()
グリーンビルでのワークショップ ()
グリーンビルでのホームステイ ()
ワシントンD. C. のフィールドスタディ ()
ミネアポリスのフィールドスタディ ()
調査旅行全体 ()

3. 今回の調査旅行のなかで最もよかったものは、最もよくなかったものは

最もよかったもの： (理由)

最もよくなかったもの： (理由)

4. アメリカ合衆国の社会と文化を理解するための教材開発にとって有益だったものを3つ挙げなさい。

(1)

(2)

(3)

5. 今回の調査旅行で学んだアメリカ合衆国の社会と文化の何を、児童・生徒に伝えたいか。

6. 来年度以降の計画について

継続すべき点は：

改善すべき点は：

(2) 評価の結果

アメリカ合衆国現地調査の終了時（1993年8月10日の帰国時の飛行機内）において、今回の現地調査の参加教師15名に対して、上記の評価問題によって自己評価を行った。その結果は下記の通りである。

① 調査旅行についての5段階評定（調査問題2）

項目	平均
ニューヨークのフィールドスタディ	3.7
グリーンビルでのワークショップ	4.7
グリーンビルでのホームステイ	4.5
ワシントンD.C.のフィールドスタディ	3.5
ミネアポリスのフィールドスタディ	3.8
調査旅行全体	4.4

② 今回の調査旅行のなかで最もよかったもの（調査問題3）

項目	人数
グリーンビルでのワークショップ・ホームステイ	12
多くのアメリカ人との出会い	2
その他	1

③ 今回の調査旅行のなかで最もよくなかったもの（調査問題3）

項目	人数
ニューヨーク、ワシントンのフィールドスタディ	7
ハードスケジュール	3
ミネアポリスのフィールドスタディ	2
準備不足	1
その他	2

④ アメリカ合衆国の社会と文化を理解するための教材開発にとって有益だったものを3つ挙げなさい。（調査問題4）

項目	人数
学校・教育施設等の訪問・調査	11

ホームステイ	9
現地の人々との対話	7
現地教師との対話・インタビュー	6
現地調査	5
児童・生徒との対話	3
現地スタッフとのネットワーク	2
印刷資料	1
食事	1
大都市と小都市の比較	1
共通理解をもったスタッフ	1
現地の厚いもてなし	1

- ⑤ 今回の調査旅行で学んだアメリカ合衆国の社会と文化の何を、児童・生徒に伝えたいか。(調査問題5)

項目
民族的・宗教的背景は異なっても人間として本質的に同じであること
親が子どもに願っていることは同じであること
生活・文化の相違とそこから参考にすべきこと
ボランティアの組織化の様子とボランティアに対する論理
内容は異なるが同じ問題を抱えていること
同じゴールに向けて共同のアプローチをとることの必要性
国は違っても共通の悩みや願いがあること
他人の違いを受け入れながらも個人として地域社会に貢献していこうとする 人生に対する考え方や態度
地域の自然環境を生かして人々が豊かな暮らしをめざして工夫・努力していること
豊かさへの関心とフレンドシップ
多くの人と話したこと、見たこと、感じたことのすべて
アメリカ合衆国の個人主義が、勝手気ままなものでなく、常に他者のことを 配慮しつつ自発的に社会に貢献することを求めていること
国土の広大さや考え方の違い
家族や弱者を大切にしている社会
農業の規模や環境は違っても日本と共通の悩みがあること
ボランティアマインド(愛と思いやり)
多様性の中の統一性
自分たちとは異なるものに対する受容性の深さ
ニューヨークやワシントンがアメリカのすべてではなく、アメリカの一部 でしかないこと

複雑な民族の混在する社会であること
 多様な考えや生活を尊重しながら、その困難を克服しようと生活している姿
 学校生活を楽しくするために友達と取り組んでいる共通した姿

⑥ 来年度以降継続すべき点は（調査問題6）

項目	人数
ネットワークづくり	5
ホームステイ	5
チーム編成	3
現地教師との話し合い	2
一ヶ所での長期滞在	2
ニューヨーク、ワシントンの訪問	2
グリーンビルのフィールドワーク	1
事前研修	1
人選	1
まとめの日程	1

⑦ 来年度以降改善すべき点は（調査問題6）

項目	人数
事前準備	9
ハードスケジュール	7
事前研修の充実	5
滞在箇所の厳選	4
英語の先生の位置付け	2
活動内容の精選	1
教材の共同開発	1
教材の普及	1
自由行動の確保	1
他教科の教師の参加	1
その他	1

2. 各チームの研究の自己評価

(I) チームA（富村，庄野，田尻）

① 1993年度の研究の自己評価

[事前研究について]

チームAは、次の日程で事前研究のための会をもち、研究の推進を図った。

- 4月25日：チーム編成
 テーマの設定「学校生活を中心とした日常生活（小学生）」
- 5月23日：テーマの具体化 ①個人をもとにした紹介形式
 ②スライド主体の構成
 ③18視点による素材の教材化
- 5月30日：視点の焦点化 18視点→7視点
 日本から提供するスライド教材内容の検討→各自作成
- 6月26日：現地での調査内容の検討
 27日 作成中のスライド内容の確認
- 7月25日：スライド教材の作成 ①34の各コマのねらい
 ②コマに即した紹介文の吟味
 ③コマに即した紹介文の英訳

私たちの事前研究の眼目は、比較教材としてアメリカ側に提供する「小学生の学校生活を中心とした日常生活」のスライドの内容の検討・作成に向けられた。「より多くの子どもたちにインパクトを与えることができる教材」（國枝先生談）とするため、アメリカ側スタッフによる実践および教材作成に取り入れられるように、日本側の提供教材はより具体化されることが大切であると考えたわけである。その意味で、すぐに活用でき作成の視点が明確なスライド教材は、意義があると思われる。反省点としては、作成時に交換先であるグリーンビルについての具体的な情報を得ていなかったため、一部不十分さがあったこと（提供スライドに自然環境の理解を図るコマを加える必要があったこと、等）が挙げられる。

[ワークショップ・現地調査について]

私たちの現地調査の眼目は、グリーンビルの自然環境と環境を生かした産業にかかわる資料収集および当地の教師とのネットワークづくりに向けられた。綿密な計画のもとで、多くの有益な情報を得ることができたこと、ウィンターグリーン小学校への2日にわたる訪問・同校教師宅へのホームステイを通してネットワークの基礎ができたことなど、多大な成果をおさめることができたと思われる。反省点としては、より効果的な共同作業のためには、内容を伴った語学力を培っておく必要があったことが挙げられる。その意味で、今回のように英語に通じた教師とともにチームを編成したことは的を得ていたと考えられる。また、ネットワークづくりにあたって、日本の教育について私たち自身が正確な知識を提供できるような準備をしておくべきだったことが挙げられる。「掃除」や「給食」そして「塾」、「教育制度」など、多様な事柄について質問を受け応答したが、どの程度正確なものであったかについては疑問が残る。事前研究にあたっては、もっと留意すべきだったと考えられる。

[事後研究について]

○ 9月11日：現地調査・ワークショップの記録の検討，英訳

12日 報告書のプロット案の作成

○ 10月11日：現地調査・ワークショップの記録英訳版の検討

教材案の報告・検討

12日 国際理解学習「口米の給食」公開（庄野教諭）

私たちの事後研究の眼目は，報告書の「現地調査」および「教材開発」の原稿作成に向けられた。田尻教諭・レベッカ教授の尽力により，前者については一つの成案を作成することができた。また，調査内容をもとにした国際理解学習を構想し，イーストカロライナ大学メンバーも参観する中で公開できたことは，ネットワークづくり，および子どもたちの国際理解を図る上で大きな成果をおさめたと考えられる。

[教材開発について]

教材開発については，教材案を作成するに留まり成案を作成するに至っていない。反省点として，教材開発の要となる交換スライドの作成状況について，事後の連絡をとらないまま経過してしまったことが挙げられる。また，この時期はウィンターグリーン小学校の新学期（年度始め）にあたるだけに，スライドの作成にあたっては相当の期間をあらかじめ計画化しておく必要があったと思われる。

② 1994年度以降の研究の課題

本年度の研究の今後の課題として，第6回研究会で，レベッカ教授とまとめたのは，次の点である。

(a) 子どもの日線（興味・関心）に一層即したスライド内容に改善したい。ウィンターグリーン小での視聴によると，「遊び」「服装」について強い反応を得た。「掃除」「給食」に加え，これら4視点で構成する方が効果的であろう。

(b) 視聴後の子どもの反応を相互に持ち寄って検討する場を設定したい。

(c) （できれば）子どもどうしが意見・質問を交流し合う場を設定したい。

これらをふまえ，来年度以降の研究について，項目ごとに記すこととする。

[事前研究について]

◎ 対象地域を明確に定め，事前研究にあたりたい。そのためには，本年度研究の継続・発展を図るという視点から，グリーンビルは有力な対象地域として設定する必要があると考える。

○ 研究分担者の予備調査は，協力者による作業の進捗状況にもよるが，早い時期に行われることが望ましい。本年度の場合には，どのような現地調査になるのか事前研究の際に不明確であり，焦点化が難しかったと思われる。

○ 遠隔地から研究協力者が参集するため，話し合う時間の確保を一層図りたい。そのためには，講話や全体会での報告会の見直し，精選が必要と思われる。

○ 研究会の初回において，新旧メンバーの引き継ぎの場を設定したい。

[ワークショップ・現地調査について]

◎ 休養は必要不可欠であるが，観光は必要ではない。その意味で，連日夜9時ごろまで「公式行事」にあてられた過重負担の軽減，ニューヨーク，ワシントンD.C.での日々の見直しについて検討する必要があるだろう。

[事後研究について]

- ◎ 本年度当初の計画（9～11月教材開発，12月～報告書作成）は妥当である。第2学期は多忙を極める時期であり，12月を最終月とする単年度研究では無理が生じるものと思われる（交換教材を位置付ける場合は特に）。
- 多忙さゆえに困難ではあるが，授業その他における生かし方や研究の評価・まとめに関する研究会を設定する必要がある。

[教材開発について]

- 配布先や活用方法について，事前研究の段階から明確にしてあたる必要がある。たとえば，そのまま活用できるように構想するならば，B4での構成で子どもに合った語句の表記が必要。その点の検討があらかじめなされることが望ましい。

(2) チームB（松田，殿垣内，白石）

① 今年度の研究の評価

[事前研究]

チームBのテーマは，「日米の中学校生活の比較」をあげ，ポイントは一日の学校生活・主な学校行事・学校ルールの3点に絞ったので，事前・事後と現地調査もスムーズに進んだ。ただ，4月末にスタッフが決まったので，準備期間が短く，時間は足りなかった。準備は早いほど良い。

[ワークショップ・現地調査]

現地では，予想以上に歓待していただき驚いた。が，事前の連絡が速やかに実働していなかったようで残念であった。例えば，パートナーやホームステイ先が決まったのは直前のようだし，生徒へのアンケートなどは結局やらしてもらえなかった。

また，ワークショップで日米の共通点や相違点は挙げられたが，その理由についてまで深く探求する時間がなかった。しかし，アメリカ側の質問事項はプリントを用意していたので，書いてもらうことで確かめやすかった。

でも，異文化ということと言葉の壁でやはり予想以上に時間がかかった。できれば，調査内容などを事前に送付して目を通してもらっておき，教育論議やその他の論議ができればさらに意義深くなるであろう。

[事後研究]

学校生活などについての持参したような内容の写真やVTRなどを相手から送付してもらうように依頼したが，こちらの意図と違ったり，内容がよく分からなかったりと，やはり異文化の戸惑いを覚える。国民性などの相違については事前にもっと関連文献を研究しておけば良かったという反省も残る。

[教材開発]

まだ授業の展開はしていないが，中学生の意識は日米ともに双方の学校生活や家庭生活について知ることを望んでいるのは確かだから，興味づけにはなり，問題点を生徒が気付いてくれれば良い。

また，今年度は広島チームで教材を作ったが，アメリカ側にも作ってもらうとさらに充実した教材ができると思う。そして，双方の生徒が将来に向けての国際交流を深めるきっかけにして欲しい。

[その他]

今回のプロジェクトによってできたアメリカの大学・中学校の社会科教師とのネットワークを今後継続して生かすことがポイントとなる。

② 来年度の課題

[今年度の反省から]

事前研究では、できるだけ早くスタッフを決定し、早くテーマを決めて取り掛かるほど良い。

現地調査・ワークショップでは、早くパートナーを決めてもらって、できれば事前に調査内容に目を通しておいてもらうとスムーズに研究が進むようになる。特に学校生活をテーマにすると、6月の夏休み前までに協力をして欲しいので、双方ともに準備を早くする必要がある。

事後研究では、あとから視聴覚などの資料を送付してもらうことはあまり期待はできないので、現地調査時に完了すべきである。また、質問事項も書いてもらうようにした方がよい。

教材開発では、両国で作成したものを交流し合うようなことを期待している。

[来年度へのテーマについて]

- (a) 日米の授業形態の違いの原因と効果などについて
- (b) 休み中の生徒の過ごし方について
- (c) 清掃やクラブ活動などのように、ある1点の比較をするなど
- (d) その他

(3) チームC (小嶋, 今福, 東岡)

① チームの活動に関して

- (a) 人種、民族、宗教、社会階層など、今日のアメリカを統一的に代表させて論じることの難しさは、今回の研究の冒頭でも述べた通りである。私たちの研究の前提は、アメリカ南部の一つの田園都市を対象とし、そこでの調査結果をよりどころにしているということである。もとより、今回の調査結果が、アメリカのすべての家族について論じているものではないことは、自明のことであるが、この研究を今後も続けていくのであれば、今回の調査とは異なる条件での調査をしていくことが望まれる。
- (b) メンバーが、広島と岡山に分かれていたこともあり、相互の活動や連絡に支障をきたすことがあった。本会の性格上、地理的な問題はいたしかたないことであるが、その前提にたった適切な研究体制を構築することを痛感している。

② 研究会全体の活動に関して

- (a) 社会、英語以外のメンバーの参加がぜひ望まれる。国際理解のためには、文化について論じることのできる人、また、広い視野に立って教育について実践している人の参加が必要であると考えます。
- (b) 今回のメンバーのつながりを絶やすことなく、国際理解教育を実践する仲間として今後も先駆的な活動が続けられるような組織づくりをぜひお願いしたい。

(4) チームD (田中, 根平, 鷹家)

① 本年度の研究の自己評価

[事前研究]

- (a) チーム内で話し合う時間が絶対的に不足していた。メンバー3名が、広島・岡山・鳥取と離れていたため、研究会以外で意見を交わせることができなかった。
- (b) 我々のテーマについての先行研究を見つけることができなかった（努力が足りなかった）。そのために、アメリカでのボランティア活動の実態がわからず、調査内容についてポイントが絞りきれなかった。
- (c) メンバー3名とも、日頃から日本のボランティア活動について不満を持っていたので、目的意識は明確であった。

[ワークショップ・現地調査]

- (a) プレゼンテーションにおいては、調査の目的を明確に示して、アメリカ側メンバーの協力を得ることに成功した。
- (b) ボランティア活動に関心の深いリビー博士の極めて適切なコーディネートにより、効率的に施設を訪問し、多くの人々から貴重な話を聞くことができた。ただ、訪問先についての予備知識がほとんどなかったため、事前に質問事項を練ることができず、後に悔やむことが多かった。
- (c) 毎夜、3名が討論の機会を持ち、その日の調査の分析をすることができた。このためテーマについての認識が日ごとに明確になった。
- (d) ボランティア関係者から取材はできたが、実際の活動を見ることができなかった。

[事後研究]

- (a) 3名が互いに、緊密に連絡を取り合い、また研究会以外でも会合を設定して討論を行い、十分に分析を行うことができた。
- (b) いくつかの研究書を参考とすることができて、アメリカのボランティア活動について、および日米の比較についてより深い理解が得られた。

[教材開発]

- (a) 3名が、分担を決めて効率的な教材作成を行う予定であったが、それぞれが校務などにより多忙となったため、完成が遅れている。
- (b) 教材開発におけるVTRの利用は、編集作業をすることが難しいことや家庭用カメラでの撮影では画質が悪くダビングすると教材には使用し難いという理由から無理であった。

② 来年度以降の課題

[事前研究]

- (a) 研究テーマを絞り込むために、3名のメンバーが討論できる機会を増やす。チームのメンバーは、少なくとも同じ県内の者で構成し、研究会以外でも会合が開けるようにする。
- (b) 講演は、国際理解教育そのものについてだけでなく、アメリカの教育事情やフィールドスタディ実施上の留意点などについても行うようにする。

[ワークショップ・現地調査]

- (a) 訪問先のリクエストをなるべく早く行い、その訪問先について渡米以前にある程度の子備知識を得ておきたい。
- (b) パートナーが設定した訪問先が多過ぎるようならば、到着時にパートナーと話し合

って精選した方がよい。

[事後研究]

- (a) なるべく記憶の新しいうちに、また比較的時間的余裕のあるうちに、研究を仕上げるようにする。
- (b) そのためには、少なくとも夏休み中に1回は、宿泊つきで研究会を開く予定を組むようにする。

[教材開発]

- (a) VTRやスライド用フィルムを使用するよりも、一般のフィルムで写真をなるべくたくさん撮っておいた方がよい。その中から選んでスライド化してもよい。

[その他]

- (a) 来年度の各チームには、スーパーバイザーよりもアメリカ側の学校の先生がパートナーになった方がよい。
- (b) 研究の継続が重要であるので、今年度のメンバーのうち何名かは来年度もメンバーとして参加した方がよい。
- (c) 開発する教材については、両国で使えるように、日米の比較を盛り込んだものにする必要がある。また、両国で使えるものかどうか検討することが必要である。

(5) チームE (和田, 山本, 深沢)

自らの体験および調査にもとづいて授業の教材が作成できるということは、教師にとって理想であるが、それは時間的にも経済的にも難しいのが現実である。

今回のアメリカ調査において、その機会があたえられたことの意味は大きい。それにより、生徒の期待する授業の教材を作成する目的で調査を計画し、実施したのであるが、調査を終え、教材を作成した今、いくつかの成果とともに課題も残されている。課題については当初より予想されたものもあれば、そうでないものもある。それらについてきちんと整理はできていないが、以下に列挙する。

[事前研究について]

- (a) テーマおよび目的の設定について

合衆国の生活と文化理解のための教材開発のテーマとして本チームが設定したのは「産業と環境」である。調査対象地域の地域性を考慮し、検討した結果、その内容として農業を取り上げ、農家の調査を通して農民の生活を理解するための教材を作成するという目的を設定したのであるが、それがやや漠然としており、焦点化すべきであった。目的が大きすぎ、具体的でなかったといえる。

国際理解の教材を作成するということを調査の目的の中に明確にしていなかったことは課題として残っている。

- (b) チェックリストについて

農家調査のためのチェックリストを作成したのであるが、その内容が農業経営から生活まで多岐にわたり、項目数が多くなってしまった。事前にもっと精選し検討すべきであった。

- (c) 事前の研究について

合衆国の農業および農民についての調査にかかわる事前の学習が不足であった。す

くなくともグループでの事前学習をもっとやる必要があった。その方法と内容についても検討すべきであろう。

[ワークショップについて]

- (a) 現地でのワークショップは全体およびチームともよかったが、十分な議論ができなかった。受人側の準備は非常に良かったし、現地での我々の細かい要求に対しても気持ち良く応じてもらったことには感謝しなければならない。

[現地調査について]

- (a) 農民および農業関係者から直接話を聞き、多くのことを知り、そして学ぶことができた。
- (b) 内容的には最初に予定していた内容の調査が十分にできなかった。その理由としては、調査の時間が足らなかったことがあるが、調査項目をもっと検討し、精選する必要があったと思う。それに加えて、事前の準備不足があげられる。すなわち、調査を実施する前提としての合衆国の農業および農家についての事前学習が不足していた。
- (c) 結果として、思ったほど成果があがらず、やや表面的な調査に終わったことは否定できない。
- (d) 調査の最終的な目的である生活の部分についても残念ながら余り聞けなかったし、作成した教材の中にアメリカ農民の「暮らし」があまり入っていない点は、今後の課題として残っている。

[事後研究について]

- (a) 事後研究において調査不足の点や確認事項などについて相手側との連絡が取れたことは良かった。教材づくりに関するネットワークづくりができたことは評価できる。

[教材開発について]

- (a) このチームでは教材をそれぞれ個別に作成した。その結果、教材開発についてメンバーの個性を尊重する結果となっているが、チームとして教材作成についての話し合いの時間と場を設定すべきであったと思う。

3. イーストカロライナ大学スタッフによる他者評価

(1) 広島プロジェクトに関する評価シート

Evaluation Sheet about the Hiroshima Project

Please answer the following three questions.

We are looking forward to having frank response from you.

Name: _____

- Q1. Comments on the activities of the Hiroshima Project in Greenville, in August 1993.
- Q2. Comments on the development of materials for understanding of American Society and Culture.
- Q3. Suggestions for the improvement of the Hiroshima Project in future.

(2) 評価の結果

アメリカ合衆国現地調査の際の研究協力者として援助してもらったイーストカロライナ大学のメンバーを迎えて、フォローアップの会議を1993年10月11～12日に広島市で開催したが、その際に自費で参加してもらったイーストカロライナ大学メンバーに対して、上記の評価シートによって、広島プロジェクトについての評価をしてもらった。その結果は下記の通りである。

① ドン・スペンス博士

Q1

グリーンビルに来る前に作られた計画は、綿密によく考えられたものだった。このため、現地の立案チームは各グループのニーズに対処できるように前もって協力、調整することができた。ノースカロライナと日本の両グループは、共同でよく作業を行い、比較的短期間に多くのことを成し遂げた。米日両チームが共同して、教材開発と同様にみごとなフォローアップの活動を行ったことは、特に注目すべき重要な点である。

Q2

今回開発された教材は、素晴らしい出発点となった。引き続き、現、及び次期グループによって、教材のフィールドテストや改善を行べく研究を進めることが必要である。アメリカの協力校においても同様の教材を開発する必要があるし、また両方の一連の教材は英語と日本語の両国語で出版することが望ましい。

Q 3

現在のプロジェクト及び、本プロジェクトの成果のひとつであるアメリカの協力校システムに関して、より長期的な計画が必要である。全般的には、みごとに実行された、例外的ともいえるほど素晴らしいプロジェクトであった。すぐれたチームで、すぐれた成果を挙げることができた。

② パトリシア・キャンベル博士

Q 1

各チームは、米日両国にとって重要な種々の領域についての研究を行った。この一週間は、情報収集の活動で多忙をきわめた。日本の教師が活動の中で示した反応や熱心さは、圧倒されるほどのものであった。グリーンビルの協力者諸氏の熱情も、また圧倒されるものであった。現地訪問、ホームステイ、情報収集、協力参加などで我々がコンタクトをもったグリーンビルの人々も、また熱心に情報を集めたり、日本の教師をもてなした。このプロジェクトは、それに関わったすべての人にとって、長く記憶に留めるほど、有益であった。

Q 2

教材は、絵、ビデオ、その他の表現方法によって、とてもよく開発されていた。米日両国間の比較がよく示されていた。

Q 3

事前にチームリーダーとコンタクトをもつことが必要である。なぜなら、チームのニーズに対応することができるように、内容やスケジュールなどをあらかじめ計画しておくことができるし、内容変更の助言も可能になるからである。また、合衆国ノースカロライナ州の魅力に出会ってもらうためにも、州都ローリーでの一日の滞在を計画の中に入れることを提案します。

③ レベッカ・ブレント博士

Q 1

グリーンビルで一緒に仕事をすることができたことは大きな喜びであった。チームAと一緒に過ごす中で私は、彼らが大変熱心であり、研究活動を楽しんでいることを知った。私は、彼らが授業期間中に小学校を訪問することができたらよかったのには思うが、にもかかわらず、我々は限られた時間の中で多くのことを成し遂げることができたと思う。

Q 2

開発されたこれらの教材は、米日両国の文化の理解にとって、素晴らしい可能性を

もっている。ウィンターグリーン小学校の教師と校長は、チームAが開発したスライドを使用することに熱心だったし、その可能性についても大きな関心を示した。

Q3

私は、彼らのニーズに完全に応えるためにも、彼らがグリーンビルを訪問する前から、チームと一緒に直接仕事をしたい。

④ エドウィン・ベル博士

Q1

このプロジェクトの活動は成功であった。しかしながら、事前の共同の討論と調査研究の企画のための時間がもっともてていたらと惜まれる。すなわち、彼らがアメリカに到着する時に、チームにとって利用可能なアメリカの研究文献が用意されていれば、訪問はもっと有意義なものになるだろう。

Q2

教材はよくできている。しかし、小さなサンプルから過度の一般化を行う危険があるように思う。ノースカロライナ州のグリーンビルのある学校は、すべてのアメリカの学校を代表しているわけではない。

Q3

日本の参加者がノースカロライナ州のグリーンビルを訪問する前に、彼らの関心があるテーマについてのアメリカの研究文献に触れさせておくことが望ましい。

⑤ ジム・ウェストモアランド博士

Q1

私は直接には関わっていなかったのでコメントする立場にないが、彼らが直接インタビューをした先生（ファーム学校のタッカー先生など）やプロジェクトの参加者から、すばらしいとの報告を聞いた。

Q2

私は、チームDと一緒に仕事をする事ができる恵まれた機会を得た。彼らの仕事は際立っていた。彼らは、過去40年間に起こったいくつかのアメリカの社会的変化を理解しながら、ボランティアに参加する個人の動機を分析しているが、その合衆国のボランティアリズムの役割についての彼らの洞察は、すばらしいものであった。

Q3

イーストカロライナ大学にとっては、日本のプログラムで開発されたあらゆるカリキュラム教材が有益であると考えます。どうか、協力校とのそのようなすばらしい協力関係を継続して行ってほしい。今、我々はすばらしい協力関係の上に立っている。私は、イーストカロライナ大学のためになされた協定と友情に貢献されたスペンス博士と小篠教授に敬意を表す。

Ⅶ 1993年度の研究の総括と今後の課題

1. 1993年度の研究の総括

(1) 1993年度の研究の特色

① 日米の生活文化の相互理解を目指した教材開発

1993年度の研究の特色の第1は、アメリカ合衆国の生活文化についての単なる異文化理解学習の教材ではなく、日米相互の教師にとって利用可能な、また日米の生活文化の相互理解学習のための教材開発を試みたことである。すなわち、日米の生活文化の比較を通して、その相違点と共通点を理解し、その背景を考察していくような教材の開発を目指したことである。

② 日米両国の教師の共同研究としての教材開発

第2の特色は、教材研究および教材開発にあたっては、日米両国の教師の共同研究として取り組み、相互に協力しながら教材開発を行うことを目指したことである。これまでの研究の多くは、日本側がアメリカ合衆国理解の教材開発を、逆にアメリカ側が日本理解の教材開発を独自に試みるものであった。そこでは知りたいことを知るだけの教材開発にとどまり、結果として日米相互の文化理解に結びつかないという弊害もみられた。そこで本研究では、知りたいことを知るための教材の開発ではなく、知ってもらいたいことを相互に学ぶ教材の開発を試みた。

そのために、日本側教師とパートナーとしてのアメリカ側教師との共同での現地調査、教材の交換、教材開発のためのワークショップを重視した。また、その過程で将来にわたっての人的つながりを継続する、日米教師間のネットワークをつくることを重視した。

③ 日本語・英語の2カ国語の教材集としての教材開発

第3の特色は、日米両国において相互に利用が可能なように、日本語・英語の2カ国語での教材開発を行ったことである。また、開発した教材が広く普及していくためにも、より多くの教師によって利用が可能なように、公民館など学校以外の施設での利用も可能なように、開発した教師の個人的な財産にとどまる学習指導計画案という形式ではなく、教材集という形式での教材開発を行ったことである。

④ チーム編成による教材開発

第4の特色は、日本側教師とアメリカ側教師との共同研究や日本語・英語の2カ国語での教材開発のためにも、社会科教師2名と英語教師1名によるチーム編成を採用したことである。全体で5チームを編成したが、各チームはそれぞれの問題関心に基づいて研究テーマを設定し、主体的に教材研究および教材開発に取り組んだ。

⑤ フォローアップおよび評価を重視した教材開発

第5の特色は、1回限りのアメリカ合衆国現地調査による教材開発ではなく、その後のフォローアップのための会議を通して教材の改善をはかることを重視したことである。また、研究メンバーの自己評価や他者評価を通して教材の改善をはかることを重視したことである。

そのために、今年度は、現地調査に基づいて教材案が作成された段階で、アメリカ側のパートナー（イーストカロライナ大学のメンバー6名が自費で訪日してくれた）を迎えて

のフォローアップの会議を開催し、教材の改善を試みた。また、研究の継続・発展という観点から、今後は日米両国での実践を通して教材のさらなる改善をはかることとした。そのためにも、アメリカ合衆国の現地調査地域を変えるのではなく、今後も同一地域（グリーンビル、ミネアポリス）での現地調査を重視すること、今年度の研究協力者は今後も研究スタッフとして継続して研究に参加・協力していくことが確認された。

(2) 1993年度の研究成果

① 日米教師間のネットワークづくり

1993年度の研究成果の第1は、アメリカ側パートナーとの共同によるグリーンビルでのワークショップやフィールドスタディ、グリーンビルでの学校訪問の際の日米教師間でのアメリカ理解学習と日本理解学習の情報交換、ミネアポリスでの現地教師の協力によるフィールドスタディ、アメリカ側パートナーであったイーストカロライナ大学のメンバーを広島に迎えての教材の改善・修正のためのフォローアップ会議などを通して、日本側教師とアメリカ側教師との間のネットワークづくりができたことである。また、その過程で、学校間のネットワークづくりもできたことである。

② 参加教師の主体的な取り組みによる生活文化の深い理解

研究成果の第2は、アメリカ合衆国の現地調査に参加した教師のすべてが、実力のある教師であったこともあり、全員が問題意識をもって主体的に現地調査に取り組み、成就感のある活動となったことである。また、グリーンビルでの現地スタッフとの協力による長期のフィールドスタディやホームステイ、ミネアポリスでの現地教師との協力によるフィールドスタディなどを通して、参加教師のアメリカ合衆国の生活文化に関する深い理解をはかることができたことである。

③ 日米教師の共同研究としての教材開発

研究成果の第3は、相互の文化理解のための教材研究と教材開発を、日本側教師とアメリカ側教師とが相互に協力しながら共同研究として行うことができたことである。また、そのことの重要性を確認することができたことである。

④ 相互の文化理解のための教材開発

研究成果の第4は、アメリカ合衆国の生活文化と日本の生活文化を相互に理解するための次の5つのテーマについての教材を5チーム編成で開発することができたことである。

- (a) 小学生の生活—地域の自然環境と生活とのかかわり—
- (b) 中学生の生活—一日の学校生活・学校行事・校則—
- (c) 家庭での人々の生活—子育てにみるアメリカ人の理想—
- (d) 地域の人々の生活—ボランティア活動—
- (e) 産業と環境—農業と人々の生活—

⑤ カリキュラム開発の視点の発見

研究成果の第5は、生活文化についての相互理解のためのカリキュラム開発の視点として、次の3点を発見したことである。

- (a) 生活文化に関する相互理解のためには、学校生活・家庭生活・地域社会生活・職業生活といったフレームでのカリキュラム開発が有効であること。
- (b) 生活文化に関する相互理解のためのカリキュラム開発においては、上記のフレーム

の中で、できるだけ具体的な生活場面の教材の開発が必要であること。例えば、学校生活では、給食の違い、掃除の違い、学校行事の違い、校則の違い、クラブ活動の違いなどが教材として有効である。家庭生活では、家庭教育や子育ての方針の違い、理想とする家庭生活やライフスタイルの違いなどが有効である。地域社会生活では、ボランティア活動の違い、社会的弱者に対する取り組みの違いなどが有効である。職業生活では、農業が直面している課題の違い、社会の変化に対応した農業の新しい取り組みなどが有効である。

- (c) 生活文化に関する相互理解のためのカリキュラム開発においては、相互の生活文化の比較を通して文化理解をはかるような教材の開発が有効であること。すなわち、生活文化の相違点と共通点の発見（「どのような違いがあるのか、どのような点が共通しているのか」）、相違点と共通点が生まれる背景・理由・条件・原因の探求（「なぜそのような相違点が生まれるのか、なぜそのような共通点があるのか」）、相互理解のための判断（「それぞれの生活文化のよさは何か、相互に理解し合うためにはどうしたらよいか」）が必要である。

(3) 1993年度の研究の問題点

自己評価や他者評価の結果からもわかるように、1993年度の研究において反省すべき問題点は、次の5点である。

- ① アメリカ合衆国の滞在地が4ヵ所もあったことや、滞在地でのスケジュールがハードになりすぎたこと。
- ② 大都市と小都市の比較という意味もあって、ニューヨークとワシントンD.C.をフィールドスタディの場所として組み込んだが、フィールドスタディの箇所を厳選してじっくりと調査する必要があったこと。
- ③ 研究開始の年であったことこともあって、参加教師のニーズに応える事前研究としてはやや不十分な点があったこと。
- ④ 準備のための時間不足という問題もあって、アメリカ合衆国側のパートナーがなかなか決まらず、現地調査の事前準備が万全でなかったこと。
- ⑤ 安全面を考慮して、ニューヨークとワシントンD.C.のフィールドスタディに関しては、半分を添乗員が同行し旅行会社の計画で行動したが、参加教師の体験活動の重視という点で必ずしも必要なかったこと。

2 今後の課題

(1) 多面的なネットワークづくりの推進

今年度は、共同研究としての教材開発の活動を通して、日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間のネットワークづくりはかることができた。しかし、それはまだ個人的な協力関係の構築や教師間の友情を深める段階にとどまるものであった。

今後は、広島大学とイーストカロライナ大学・ミネソタ大学との間のネットワークづくり、日本の各小・中・高等学校とアメリカ合衆国の各小・中・高等学校との間のネットワークづくり、日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間のネットワークづくり、児童・生徒同士のネットワークづくりなど、日米両国間の多面的な人的ネットワークづくり

を進めていくことが必要である。

(2) 共同研究の質的发展

今年度は、日本とアメリカ合衆国の相互の社会と文化を理解するための教材研究と教材開発を、日米教師の共同研究として行うことを試行し、大きな成果を得ることができた。しかし、まだそれは、情報交換、相互の情報収集、内容の正確さのチェックの段階にとどまるものであった。

今後は、相互に討議しながらの教材開発、相互に開発した教材の交換、日米両国での実践を通しての教材の改善・修正をはかっていくことが必要である。

(3) 教材の改善・修正

今年度は、学校生活・家庭生活・地域社会生活・職業生活に焦点をあてて、日米両国の生活文化の相互理解をはかるための教材開発を行った。しかし、短期間での現地調査に基づく教材開発であったこともあり、教材の具体性という点ではやや課題が残った。また、比較という点でも、相互の文化の相違点と共通点を把握する段階にとどまり、その背景を分析し深く考察するまでには至らなかった。

今後は、日本での事前研究・事後研究、アメリカ合衆国での共同研究としてのフィールドスタディやワークショップ、日米両国での実践などを通して、教材の改善・修正をはかっていくことが必要である。そのためには、カリキュラム開発のためのフレームワークを設定していくこと、フレームワークに基づいて教材化の視点を明確化に教材をできるだけ具体化していくこと、期間が限られた中での現地調査を教材づくりにしぼって行うこと、日米の文化の相違点や共通点の背景を探っていくための文献研究やフィールドスタディを充実させていくこと、今年度の研究協力者は今後も研究スタッフとして継続して研究に参加・協力していくことなどが必要であろう。

(4) 新しいテーマの教材開発

今年度は、日米相互の社会と文化を理解するためのテーマとして、生活文化に焦点をあてて教材開発を行った。しかし、生活文化の理解だけでは日米相互の社会と文化を理解するにはならないであろう。

今後は、日米相互の社会と文化をより深く理解するためにも、生活文化をテーマとして今年度開発した教材の改善・修正をはかることと同時に、それに加えて、歴史的伝統・遺産という観点や、現代社会が直面している課題の解決という観点からも教材開発を行うことが必要である。例えば、歴史的伝統・遺産という観点では、祭り、人物、文化遺産、文化交流などについての教材の開発が考えられよう。また、現代社会が直面している課題の解決という観点では、環境問題、外国人労働者の移住問題、多民族・多文化問題などについての教材の開発が考えられよう。

(5) 研究成果の普及・発展

今年度は、研究成果の普及に関しては、開発した教材がより広く普及していくように、教師の個人的な財産にとどまる学習指導計画案の形式での開発ではなく、学校や公民館等

においてできるだけ多くの人が利用できるように、教材集という形式で教材開発を試み、開発した教材は抜刷としてできるだけ多くの関係機関に配布した。また、参加教師の多くは、勤務校等での授業においてその実践と普及に取り組んだ。さらに、地域の社会科指導資料に研究成果を盛り込んだ教師や、研究成果を研究会で発表した教師もいた。

今後は、参加教師の学校での実践、教育センターや公民館での講座、研究会での発表、各地域でのワークショップなど、多様な方法で研究成果の普及・発展により積極的に取り組んで行くことが必要である。

編 集 後 記

広島大学国際理解教育研究会は、1993年1月より3ヵ年計画で「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」を行っていますが、ここに1993年度（第1年次）の研究成果の報告書を刊行いたしました。なお、報告書は、日本語と英語の2ヶ国語で刊行しています。

本研究報告書では、本研究の概要、1993年度の研究の概要、1993年度の研究の内容、1993年度の調査研究、1993年度の教材開発、1993年度の研究の評価、1993年度の研究の総括と今後の課題について報告いたしました。本研究報告書の内容の中心をなすものは、中国地方5県の先生方によって、アメリカ合衆国での現地教師の協力の下に行われた教材研究に基づいて開発された、アメリカ合衆国と日本の生活文化の相互理解をはかるための教材です。いずれの教材も、広く学校や公民館等での学習に利用可能なように、具体的なものばかりです。多くの関係機関において活用していただければ幸いです。

本研究報告書を通じて、生涯学習時代の今日、学校・地域における国際理解学習、なかでも日本とアメリカ合衆国の文化の相互理解学習が、多くの先生方によって一層推進されますことを念願しております。

（小原 友行）

本報告書は、米日財団 (United States - Japan Foundation, USJF) の研究助成を受けて研究した成果を刊行したものである。

アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究 第1集

印刷 1994年1月31日 発行 1994年1月31日

発行者 広島大学国際理解教育研究会 代表 溝 上 泰
〒734 広島市南区東雲三丁目1-33
広島大学学校教育学部
Tel. 082-281-3141 (代表)
印刷 ㈱高橋贍写堂